

## 升沢へ“水落切”を越えて

黒川郡大和町は、宮城県のほぼ中央に位置し、翅を広げた蝶のように中央が狭くつばんだ東西に横長の形をしている。東部は広い水田地帯が見はらせる平地が広がり、西部は山形との県境となっている船形連峰の山麓から山麓が覆をひいている。

その大和町のつばんだ翅の付け根に位置する吉岡の町から県道 147 号 樹沢吉岡線を西へたどると、沢渡を最後の集落として、すぐに急勾配でのぼる山岳道路となる。やがて長者館山の風早峠を越え、道は荒川兩岸の河岸段丘をたどって、船形山登山口の旗坂野宮場までのぼりながら続いている。

かつて、最良の集落は沢渡ではなく、風早峠の手に嘉太神、峠を越えた荒川沿いには下原・新田・種沢・升沢(あわせて升沢地区)の山間集落があった。升沢地区も嘉太神地区も村をあげて移転し、いまはかつての集落の姿はない。

升沢への道をたどるとき風早峠は「分水嶺」となる。風早峠の手にあった嘉太神地区は北泉ヶ岳北麓に発する吉田川の左岸に位置し、一方峠を越えてたどる升沢地区は船形山東麓を源流とする荒川の左右河岸段丘上に散在している。つまり吉田川も荒川も大きくは鳴瀬川水系でありつつ、上中流域は船形連峰の異なる谷筋をたどって、それぞれ大和町と色麻町を流れ下る。

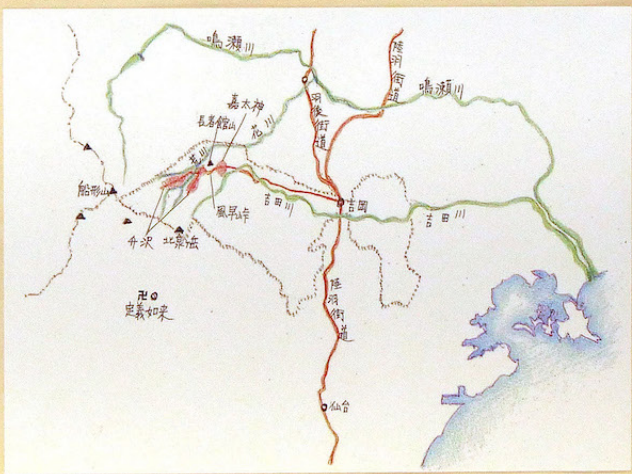
升沢の集落は、風早峠を越えた荒川流域にくらしを営んできたため、歴史的には加美郡色麻と、荒川を介した道南や通南によって結びついてきた。黒川郡吉岡との強い結びつきは、戦後玉城寺原演習場の拡張により、色麻への道が開ざされてからのものだという。

天から降った雨が山脈の稜線で切り分けられて両側に流れ落ち、それぞれ異なる沢筋を流れ下り、同じ沢面に降る雨水を集めて異なる川の本流へと導かれる。その切り分けの山の峰、分水嶺を古くは「水落切」と呼んだ。升沢は里の集落からはるかへたり、「水落切」をこえた最良のムラだったといえよう。



長者館山

風早峠から升沢方面を望む



「展示を鑑みるにあたって」  
 <本展で公開している写真はすべて、大和町升沢地区住民の調査において、1999年より2003年までに、東北民俗の会升沢調査会の手代木信成氏により撮影されたものである。そのうち旧参住民などの所蔵写真の複製には、その旨の注記を付した。>  
 <展示にあたっては、升沢のくらし全体において骨格をなす視座と事柄を抜き出し、それを二十二の節とし、節の言葉の内実となる、さらにそれと親和し共鳴する写真を選んで配置した。>

<各節の解説および土地の人の言葉は、升沢調査の報告書「升にくらし―集回移転に伴う民俗調査報告書(2003、東北民俗の会編、大和町教育委員会刊)の記述にもとづき、升沢調査会に参加した小田嶋利江が作成した。なお一部に「升沢にくらし」に盛り込めなかつた調査資料による記述をくむ。>  
 <したがって各節の解説は、くらし年代の記述がない場合、調査時の記者たちがくらしに感した昭和初期から戦後高度経済成長期までのくらしの聞き書きにもとづいている。>

<すなわち、2000年代初期の記録写真と、昭和前期の記述を核とする聞き書きにもとづく解説・土地の人の言葉とは、重なりあいつつ、そのあたりにくつもの記憶の層がまきまきまれている。写真の風景を意として、変わったこと、変わらないこと、消え去ったこと、残ったことなど、記憶の層という土地の歴史を想起していただければ幸いです。>